

よい情報検索をはかる、という方式も行われている例がある。

最後に、最も基本的なことに一言ふれたい。コンピュータを利用する情報検索が可能な為には、先ず資料をコンピュータ可読の形（例えば磁気テープ記録など）にすることが必要である。この最初の段階が実は一番人手がかかり、従ってまたお金もかかる作業である。一方、効率の良い検索システム（索引を含む）の開発もまた、これに劣らず人手とお金のかかる仕事である。それらをすべて人まかせにして、出来上がったものを利用

しようとすれば、必要経費の分担を要求されるのは当然である。外国で作られた磁気テープを導入するばかりでなく、わが国でもそろそろデータ入力段階からの協力を考えなければ、学術情報入手の問題は一層深刻になってゆくであろう。

よちよち歩きを始めたわが国の情報処理技術の成長を、もうしばらく温い目で見守ってやっていただきたいというお願いと、世界的な学術情報政策の問題にも研究者に関心を持っていただきたいとの念願をこめて、このつたない文をお目にかけた次第である。

姫路工大の新図書館を見学して

附属図書館 広 庭 基 介

ここでは、たしかに図書館が大学の中心に位置を占めており、今までの日本の常識から考えると、大学に対して、図書館が非常に大きく立派であった。身障者の入館への配慮も含め、正面入口から階段なしで主たる奉仕部門のカウンターに到達できるよう、崖を利用した2階をメインフロアとする工夫が珍しかった。工科大学にふさわしく直線を多用した上に、崖をまたぐメインゲートから、カウンター部分の天井、雑誌コーナーのゆったりとした壁面などにいたるまで、随所に凝ったデザインがほどこされていて、快適な気持ちにさせられたのは私一人ではなからうと思う。

館側の説明にも述べられたが、晴れた日には、室内照明を消すほどに明るい陽光が、開架式の閲覧室に入ってくる。しかも、建物の周囲にめぐらされた広い巾の廻廊がそのまま下の階の「ヒサン」になっているので、明るい陽光は直射光線ではないのである。この大変明るいことが、この図書館の一つの大きな特徴である。ガラスの多用ということを表わしているといえよう。この図書館には、たしかにガラスが多く使われている。玄関を歩いてメインカウンターまで進んでふりかえると何枚ものガラスのドアや、仕切りが看取できて壮観である。

さて、折角見学させて頂きながら、賞讃と感謝の言葉だけで終ることができないのが、この種の

見学記であるので、その点姫路工大の皆様の御海容をお願いして、図書館建築の素人ながら、気付いたことを述べてみたい。

そのひとつは、崖の下に建てられていて、ビルの第2層をメインフロアとし、そこが表玄関と主たるサービス部分となっているので、非常時の避難通路、避難出入口を入館者に判りやすくする必要があるということである。特に、利用者が館内深く、どこへでもはいつていくことができるのであるから、階をまちがえる場合が起るのではないかと、外景が見えないようなコンクリートの壁にかこまれた狭い通路や、階段がいろいろと入り組んでいると、馴れない者には危険となる場合が起りうる。1階がまるで地階であるような錯覚が起る部分があったのでそう思うのである。もうひとつは、自然科学系の単科大学の図書館であるから問題はないのかも知れないが、自然科学系の学生、教職員でも、たまには文学や哲学の書物に沈せんすることもあるのではないかと、そのような時には、欲をいえば、もう少し明るさと、透明度を落とした部屋か、コーナーがあればいいのではないかとということである。

以上は、いわずもがなの、無理にとってつけたような指摘かもしれない。そして、すぐにでも改良できることでもある。私の属しているような総合大学で、蔵書が全学300万をこえ、本館だけで

50万冊に達するという、いわば図書の洪水から起る各種の「書害」をうけている館に働く者としては、館長以下8人の方々に館務を遂行しておられるこの館が、どこもゆったりと大きくて、しかも各種の新しいアイデアや、装置をとりいれ、どこまでも明るい新館が、羨しくてたまらなかったというのが本音であった。ただ、この館を見学して学んだことを、今後、焦眉の急を告げている私た

ちの新館建設にどう生かすべきなのか、大学の規模、館の果すべき機能、蔵書数などが全く違うために、それがもうひとつわからないというのも偽らざる気持であった。

終りになったが、姫路工大の館員各位には御多忙中を一貫して御親切に御説明、御案内下さり、心からの謝意を表するものである。

第2回情報図書館学夏期シンポジウムに参加して

附属図書館 三 浦 勝 利

第2回情報図書館学夏期シンポジウムは去る7月12日（土）、午前10時より280余名が参加して東京大学理学部化学教室講堂で開かれた。藤原鎮男教授（東京大学情報図書館学研究センター長）の挨拶の後本題に入った。なお、第1回シンポジウムは昨年7月科学研究費による特定研究の中間報告として開かれている。

文部省科学研究費補助金による特定研究「大学図書館における情報処理トータルシステムの開発」は昭和53年度藤原教授を中心に総括および調整役の幹事会と3つのグループにより発足したものである。

第1班（大学図書館トータルシステムの分析と設計）においては、東京学芸大学・電気通信大学共同システムの運用の評価を中心に、目録を除く各業務について従来の機械化の問題点、システム設計の目標、新システムの基本構想が検討され、専用システムによるネットワーク形成の必要性が説かれた。

第2班（LC-MARCオンライン利用実験）においては、筑波大学、千葉大学、東京大学附属図書館、東京大学農学部、東京工業大学、一橋大学、名古屋大学の各図書館が、それぞれ200～250件のサンプル・データをとり出して電話回線を利用し、オンライン検索を行ったものである。主として目録作成の参考資料、文献検索業務への応用、収書・選書ツールとしての有効性について評価がなされ、実験途中にセンター館である筑波大学のIDEAS/77のシステム変更等もあり全体的

にみて細かい点を除けばかなり良い結果が出ているように思われた。特に、筑波大学の実験において、5年間ファイルを保存すると50%のカバー率が保てるとの結果が出たことは今後の全国中枢センターによるOn-Line Shared Cataloging Serviceを推進する場合の大きな指針となるであろう。しかし、JAPAN-MARC（昭和56年4月よりサービス開始の予定）の利用実験とローカル・インプットの問題がとり残されたのは非常に残念である。

第3班（オンライン学術雑誌総合目録処理システム）は、学術雑誌総合目録、人文・社会科学欧文編の編集経過報告および、学術雑誌総合目録システムにおけるデータ・ベースのオンライン化への予備的研究として、略誌名によるアクセスと略誌名の自動生成手法について検討を加えたものである。

以上3つのグループの研究成果について報告されたことを極く簡単に記した。この後、「これからの大学図書館」と題してフォーラムが開かれ、

- 1, 研究図書館の相互協力
- 2, 大学図書館におけるデータ・ベースの必要性と図書館員の養成
- 3, 国際的視野からみた日本の図書館の立場,
- 4, 大学図書館の機械化について

の題目で4人の講師各15分の限られた時間で講演が行われ、質疑応答に入った。いづれも興味深いテーマばかりで、また日を改めてたっぷり時間をとって拝聴する機会がもてるよう熱望する次第で